

## 広島における記憶と身体のかかわりについての一考察

大西 万知子  
ONISHI Machiko  
(COE 研究員・RA)

「傷ついたり、混乱しました。実際訳がわかりません。大人は第二次世界大戦の出来事から立ち直っていないだと受け取ることになりました。僕らは未来だけを見据えていることをわかってもらいたかったのです。ただ平和な未来が欲しいだけなんです。これは子どもたちの願いです。どうして大人はそれを受け入れられないのでしょうか。」

マット・ロイド君

原爆発祥の地、ロスアラモスに、1992年11月、子どもの平和の像を建立する計画をロスアラモス郡議会に否決されて。(NHK 広島「核・平和」プロジェクト編 2000：<sup>(1)</sup>195)

「右も左も、アラブもユダヤも、手を結んで友だちになる  
憎悪も戦争もなくなる特別な日  
おとぎ話からしかやってこないのかしら  
私はたぶん素朴な少女  
でも平和と安全とを求めるのはそんなに欲張りかしら  
旧市街の通りを何の心配もなく歩きたいというのは欲張りな夢かしら」

バトヘン・シャハクさん(ユダヤ暦15歳)の日記の詩より

自爆テロの犠牲により、1996年春死亡。

(朝日新聞 2003年6月22日付)<sup>(2)</sup>



図1 1945年8月7日広島上空 米軍機撮影。(広島平和記念資料館資料)(Quayle 1995: 8)

はじめに

マット君やバトヘンさんのような子どもたちの声を、今日、社会は、どのように受け止めているのだろうか。第二次世界大戦は、人類史上、未曾有の破壊と損害をもたらし、多くの人命が失われたのにもかかわらず、現在もなお、多くの場所で、戦争、紛争、そして暴力の応酬や憎悪の連鎖が続いている。また、情報伝達方法が多様に発達し、人、物、情報、イメージが、文化や国境を越えていく一方で、異質なものへの不寛容や自国、自民族中心主義的思考は増大している。正義の名にもとづく暴力は、今日の社会においても、問題を訴える方法として、また問題を解決する手段として受け入れられている。バトヘンさんがいうように、平和と安全は、おとぎ話の中にしか、訪れないのだろうか。現在、広島での原爆の体験を語りつぐ多くの人々の記憶は、59年前の体験であり、マット君やバトヘンさんと同じように、少年少女の時の体験である。

『年報 人類文化のための非文字資料の体系化』「博物館におけるモノとヒトとのかかわりについての一考察——広島平和記念資料館の事例から——」の論考では、広島平和記念公園にある広島平和記念資料館のモノに焦点を絞り、その集められたモノを「単に被爆したモノ」として捉えるのではなく、「集める」というヒトの行為を重ね合わせて、それらのモノを平和の実現のための資料、何が起きたかを伝えるための資料としてだけでなく、原子爆弾投下から生き残った人々の思い、祈りや意志を明らかにすることのできる資料として存在することができることを論じた(大西 2004)。そして、資料館に集められたモノから、広島の場合に存在する他の場所にかえることのできないモノに刻まれた言語、すなわち、心性のメッセージを導きだすことができる」と結論した。

しかし、前論考で問題となるのは、この場所に、形として永続的に実在できるモノ以外に刻まれた言語の存在である。例えば、生き残った人々の被爆体験を語る声がある。この語る声は、明確な音として、語る人のメッセージを伝えることができ、言語そのものであるが、同時に、発話されると消えていく性質を持ち、内容の変質を伴う可能性を持つ。そのため、この論考

では、原子爆弾投下から生き残った人々の被爆の体験を語る声を中心に、爆心地、広島における記憶と身体のかかわりを考察していく。

## I 身体という記憶の場所

記憶とは、物事を忘れずに覚えておくことであり、前論考で述べたように文字、音、物、人、場所などを通じて、長期、留まることができる。その中で、身体と記憶の関係において、ノラ(2002)は、記憶には、2つの種類があると指摘している。その1つは、真の記憶であり、それは、今日において、動作や習慣の中に、ことばでは伝えられない技の中に、本能的な知識の中に潜んでいるものであるという(ノラ 2002:38)。そして、もう1つの記憶は、変容した記憶、自らの対極に近い存在である歴史を通過することによる主意的に熟慮された記憶であり、その記憶は、本能的にはなく、1つの義務として生きられる記憶と述べる(ノラ 2002:38)。

さらに、文化によって条件づけられた身体の使い方、長い修練と反復される実践によって身につく、技術や儀礼行為など世代を超えて安定して確実に伝達される身体技法の存在も指摘されている(川田 2003:25)。

そのため、身体は、記憶を、文字や絵のような形に残すための媒体となる一方で、形としてしるされることのない、痕跡の残ることのない声、身ぶりや動作によって記憶を保持する母体ともなると考えられる。人は、あらゆる事物や現象に取り囲まれながら生きており、それらのすべてのものを、人のもつ視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚などの多様な感覚を通じて、知り得ることができる(大西 1999:82)。人は、また、喜び、恐れ、悲しみなど多様な感情を持つ。これらのことから身体は、最も身近な記憶の場所であり、行為、感覚や感情を通じて、記憶を豊かに保持する場所でもあることを示唆している。

原子爆弾投下地、広島には、被爆をめぐって文字文書や日記などの文字資料とともに、語る人々や、口承資料、絵画、写真、さらには建造物である記念碑や慰霊碑などの非文字資料が多く存在する。その非文字資料には、文字に表現されない人間諸活動を含んでいる。そこには、「書く」に加えて、「描く」や「集める」、

さらには、「語る」、「祈る」などの意識された、あるいは意識されない多くの表現が存在する。そのため、広島の出来事の記憶を理解するためには、これらの文字資料と非文字資料を平等に扱い、交錯させながら分析していくことが不可欠である。

## II 記憶の非場所 消えた声

広島原爆について伝えるこの場所は、世界に、後世に、人類文化の世界遺産の平和の象徴の場所として、広く記憶されていくかもしれない。1996（平成8）年、原爆ドームは、人類文化として世界的、普遍的な価値があるものと評価され、広島平和記念碑として、ユネスコの世界遺産条約へ登録された。1972（昭和47）年、ユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」（通称 世界遺産条約）は、世界の貴重な文化遺産と自然遺産を保護し、次世代に継承することを目的としている。この条約には、1972（昭和47）年8月から、1996（平成8）年時点で、146カ国が加盟している。1979（昭和54）年には、ポーランドにあるアウシュビッツ強制収容所も、世界遺産に登録された。また、広島のこの場所は、第二次世界大戦を早く終結させたエノラ・ゲイの成し遂げた偉業の場所、日本の太平洋やアジアにおけるファシズムを終焉に導いた場所として、記憶されていくのかもしれない（スウィーニー 2000:315）。

しかし、広島のこの場所は、本来、記憶が消失している場所—上村の言葉を借りれば、記憶の「非場所」である（上村 2000:13）（図1）。上村（2000）は、アウシュビッツにおいて、証人たちが文字どおり物理的に痕跡を残さず、消去、言い換えれば、焼却されてしまった事実の存在を指摘している（上村 2000:12）。そのような場所は、ナチスによるユダヤ人大量虐殺だけでなく、欧州において戦略爆撃という名のもとに、市民を含む無差別爆撃、例えば、1937年のドイツ軍によるゲルニカ空爆、第二次世界大戦中のワルシャワ、ロッテルダム、ロンドンなどの都市、ナチスに対する連合軍によるベルリン、ドレスデンなどの都市への攻撃、アジアにおける日本軍による無差別攻撃を受けた南京や武漢など多くの場所も、同じく記憶の非場所である（図5・6）。また、これらの場所は、苦しんでい

った大勢の人の声、証人としての声は、永久に失われた（上村 2000:12; 川田 2004:15）。

1945（昭和20）年8月6日、広島市の朝は、晴天で、真夏の太陽が昇るにつれ気温が上昇したという。当時、市内には、近郊の町や村から動員された建物疎開作業の人々を含む約28万人から29万人の市民と、約4万人の軍関係者がいたと推定されている（広島平和記念資料館 1998:20）。原子爆弾投下によって、広島市では、急性障害が一応おさまった1945（昭和20）年12月末までに約14万人（±1万人）の人々が死亡したと報告されている（広島平和記念資料館 1998:1・20）。その中には、軍需工場や建物疎開のために作業に従事していた多くの動員学徒も含まれた（図2）。

そのため、この広島平和記念公園や近くの学校には、子どもたちの死を悼む建造物や被爆の痕跡を残す資料が多く存在する。例えば、広島平和記念公園にある平和の塔は、1967（昭和42）年7月15日、広島県動員学徒犠牲者の会により、第二次世界大戦中、労働力の不足を補うため動員学徒として奉仕し、戦禍に巻き込まれて死亡した子どもや原爆の犠牲者を含めた約1万人の学徒の霊を慰めるために建立された。「原爆の子の像」は、1958（昭和33）年5月5日に、白血病で亡くなった佐々木禎子さんや原爆で亡くなった多くの子どもたちの霊を慰めるため、世界に平和を呼びかけるために建立された。この像の碑文には、「これはぼ



図2 工場となった学校（広島平和記念資料館 2004:4）





図3 原爆の子の像（広島平和記念資料館 1999：77）

くらの叫びです。これは私たちの祈りです。世界に平和をきずくための」と刻まれている（図3）。「原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑」は、1971（昭和46）年8月4日、原爆によって生命を奪われた子どもと教師を慰めるため、また、これ以上、戦争や原爆で犠牲者を出さないための願いを込めて建立された。その碑には、広島の歌人、正田篠枝さんの短歌「太〔大〕き骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの骨あつまれり」と刻まれている。

また、「広島市立高女の慰霊碑」は、1948（昭和23）年、三周忌を記念し、遺族会によって、建立された。この碑には、3人の少女が彫られているが、中央の少女が持つ箱には、占領軍のプレスコードにより「原爆」の文字を使わないように、 $E=MC^2$ とアインシュタインの相対性原理からとられた原子力エネルギーの公式が刻まれている。

また、市内に39校あった国民学校のうち、最も爆心地に近かった本川小学校（旧本川国民学校）は、約400人の児童や教職員が死亡し、そのうち、2人が生き残っただけであった（被爆建造物調査研究会 1996：34-35）。1988（昭和63）年、本川小学校は、被爆した一部の校舎と地下室を、平和資料館として開館した。この資料館には、溶けたガラスや焼けたモンペなどの被爆資料30点、写真パネル30点がある（図4）。同じく爆心地に近かった袋町小学校（旧袋町国民学校）

は、1945（昭和20）年8月6日当時、朝礼を終えたばかりの教職員と児童約160人が被爆し、そのうち生き残ったのは数人だけだった。2002（平成14）年、袋町小学校は、平和資料館を開設し、黒板に残された伝言版や、被爆した校舎の一部を保存、展示している。

このように、広島においての原子爆弾投下地、真の爆心地には、ほとんど痕跡がなくなってしまい、この場所の自然、一部の建造物や生き残った人々の身体に広島を記憶を残した。



図4 本川小学校平和資料館（筆者撮影 2004年3月）



図5 アウシュビッツ収容所（被爆建造物調査研究会編 1996：343）



図6 破壊しつくされたベルリン市街の中心地 イギリス空軍撮影（被爆建造物調査研究会編 1996：336）

### III 記憶を語りつぐ声

原子爆弾投下から生き残った人々は、被爆した資料を集めただけでなく、原爆ドームの保存運動をはじめとする被爆建造物の保存運動や核実験実施への抗議運動、手記や日記への被爆体験の記録、被爆の体験を語り始めた。

被爆体験の証言活動の実施は、財団法人広島平和文化センターでは、広島平和記念資料館では、1979（昭和54）年9月、当館の3人の被爆体験を持つ3人の職員が、広島平和記念資料館（当時、広島平和記念館）の講堂と会議室で行ったのが始まりである（被爆体験証言者交流の集い2002:17）。1983（昭和58）年9月1日から、正式に、財団法人広島平和文化センターは、被爆体験証言者8人を登録し、被爆体験証言の会を発足した。2002（平成14）年4月1日現在で、財団法人広島平和文化センターへの被爆体験証言者の数は、23名である。

被爆体験証言者交流の集い（2002）によれば、1987（昭和62）年度で、被爆体験を証言した件数は、492件であり、多くは、修学旅行などで訪れた学生のために行われた。その後、その被爆体験を語る件数は、修学旅行で訪れる学校団体数とともに増加し、2001（平成13）年度では、885件である（被爆体験証言者交流の集い2002:18）。

財団法人広島平和文化センターに登録し、現在、被爆体験の証言を続けている山岡ミチコさんは、高等女学校1年生（15歳）の時に、爆心地から800メートルの路上で、動員先の広島中央電話局へ向かう途中で



図7 広島平和記念資料館で被爆体験講話（広島平和記念資料館1999:113）



図8 カリフォルニア州バサデナで、被爆の体験を語る松原美代子さん（中国新聞1982年7月27日付）

被爆した。米国で、27回にわたる手術を受け、20年間の沈黙を経て、語り始めた。証言を始めた理由について、山岡さんは、心の傷は、決して癒えることはないが、自分の命が活かされているということと、人類がいつの日か核兵器を廃絶し、平和な世界を作り出せることを願いからと語っている（大西2004）。

また、松原美代子さんは、高等女学校1年生、12歳の時、建物疎開中、爆心地1.5キロメートルのところで被爆し、その後、大阪市立大学で十数回の手術を受けた。1962（昭和37）年、第1回世界平和巡礼の旅に出発し、14カ国訪問し、1964（昭和39）年には、広島・長崎世界平和使節団の一員として、7カ国を訪問した。さらに、1980（昭和55）年、1982（昭和57）年には、アメリカ人の友人と、アメリカ合衆国を横断し、各地で、原爆の絵を紹介するとともに、自分のような経験を他の人がしてほしくないためと被爆体験の証言を語り、現在も語り続けている（中国新聞1982年7月27日付；大西2004）。

高橋昭博さんは、中学校2年生であった14歳の時、爆心地から1.4kmにあった学校の校庭の朝礼で整列していた時、被爆した。私たちの悲惨なあの体験を最初で、最後のことであってほしいという願いから、また、原爆で亡くなった学友のために、1970年代初期から、被爆体験の証言活動を行っている（高橋1995:189；NHK出版編2000:214-215；大西2004）。





図9 ワールドフレンドシップセンターで被爆体験を語り続ける森下弘さん（左から2人目）（筆者撮影 2004年8月6日）

また、大林芳典さんは、16歳の時、爆心地から2.3kmの動員先の工場で作業をしていた時に被爆した。大林さんは、戦後は、仕事一筋に生きてきた。しかし、定年退職後、被爆者の減少の危機と、現在の平和が多くの人々の犠牲の上にして成り立っていることを、生き残った者が死者に代わって、次の世代に語り伝えなければならないと慰霊と誓いの気持ちから被爆体験の証言を語り始めた（大西 2004）。大林さんは、現在、ピースボランティアとしても、広島平和記念資料館で活動している（大西 2004）。

被爆の証言活動をする人には、どの団体に所属せず、個人で証言の活動を続ける人もいる。例えば、佐伯敏子さんは、広島平和記念公園にある供養塔が広島の原因と考え、供養塔の清掃をかかさない（佐伯 1998）。佐伯さんは、供養塔を訪れる人に対し、被爆の証言を語り、命あるかぎり、もの言わぬ死者に代わって被爆の実相を語り続けたいと述べている（佐伯 1998: 92-103; 米山 1996: 16-17）。

また、被爆体験を語る場所も、広島平和記念資料館に限らず、広島平和記念公園や近くの施設、また、依頼によって、さまざまな場所で行われている。例えば、森下弘さんは、広島平和記念公園の近くに、1965（昭和40）年、平和活動家でクリスチャンのバーバラ・レイノルズさんによって設立されたワールドフレンドシップセンターで、日本国内・外からセンターを訪れる人々に、被爆体験を語り続けている。

こうしてみると、広島を語りをする人々の中で、長い沈黙の末、被爆体験を語り始めている人がいるのに気づく。その沈黙は、前論考で触れたような個人的な

記憶を抑制する要素、痛みや悲しみ、被爆による健康、結婚や職業についての心配、GHQによるセンサージップによってもたらされたと考えられる。

上村は、経験的意味において証人のいない事件であっただけでなく、認知的および知覚的な意味での証人のいない状況、衝撃に基づく凍りついた記憶の存在を指摘している（上村 2000: 12）。ホロコーストから生き残りの一人であるプリーモ・レーヴィ（Primo Levi）も、ホロコーストで生き残った人には、正反対の現象があると述べている（バルボリーティ 2002: 46）。それは、話すことを拒むという人と、話さずにはられないという人である。プリーモ・レーヴィの場合、後者にあたるが、彼自身も彼の記憶のついて語り始めたのは長い沈黙を得てからである。川田も、生き残った人は、本当に苦しかったことは語れない、少なくとも語りたがらないことを指摘している（川田 2004: 15）。

このように、生き残った人々が被爆体験を語る行為は、米山が述べるように、「死者の声なき声に代わって」の語りと、「死者のための」語りという慰霊と祈りの行為と考えられる（米山 1996: 16-17）。その発話された声は、爆心地で消されてしまった声と、彼ら自身の沈黙の中に消えた声と、離れず強くつながっている。

#### IV 博物館資料になった声

博物館法第三条では、博物館の目的を達成するために、掲げる事業として、「実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード等の博物館資料を豊富に収集し、保管し、および展示すること」と述べられている。広島平和記念資料館では、被爆資料を収集、保存、展示するだけでなく、原爆の体験の手記などの図書を集め、また、被爆証言も、映像化し、視聴覚的な形でも記録を収集し、保存、展示している。この資料館では、1985（昭和60）年、原爆の惨状を撮影した写真家の座談会をビデオに収録し、翌年の1986（昭和61）年から、50人ずつ被爆者の証言を映像で収録している（広島平和記念資料館 1999: 113）。さらに、1995（平成7）年からは、初めて海外取材を行い、韓国人被爆者の証言を映像で収録している（広

島平和記念資料館 1999:113).

また、2002年8月1日、同じ広島平和記念公園に開館した国立広島原爆死没者追悼平和祈念館においても、被爆者の名前や遺影を登録し、被爆体験記、日記や手記、被爆体験証言の映像を収集している。この祈念館は、原爆死没者の尊い犠牲を銘記し、追悼の意を表わすとともに、永遠の平和を祈念するため、そして、原爆の惨禍を全世界の人々に知らせ、その体験を後世に継承することを目的としている。

このような、映像となった声は、本来の痕跡の残らない、発話されると消えていく性質、そして、変容する可能性を持つ性質から、時間的に継続して存在する性質、変容することない、永遠的な語りへと変化する。そのため、その映像を視聴する人は、語る人々の声を、言葉として、音となったメッセージとして、永続的に受け止めることができる。また、博物館資料になった声は、集められたモノと同じく、平和の理念の実現のための資料、何が起きたかを伝える資料、生き残った人々の思い、祈り、意志を伝える資料となる。

しかし、同時に、語ることの行為に秘められた、「死者に代わって」と「死者のため」の実践、慰霊や祈り、さらに、誓いや願いとしての実践や行為性は、消失する。



図10 韓国における証言映像ビデオの収録（広島平和記念資料館 1999:113）（筆者撮影 2004年8月6日）

おわりに

広島が出来事を今日に伝えるものは、文字、写真、映像、爆心地に残された被爆の傷跡の残る建物や記念碑、集められた物だけでなく、生き残った人々の声がある。生き残った人々の被爆体験を語る身体は、過去

の記憶とつながっている。生き残った人々の身体を媒体とした語りの実践について、その語りの一つ一つが変質する可能性を伴い、その語りの内容の原初体験の記憶の変容について、いくつかの指摘がある（川田 2004:15; 米山 1996:22-23）。ホロコーストからの生き残りの一人であるプリーモ・レーヴィも自分自身の証言の真実性を強調しながらも、自分が語った内容と現実の違いを認めている（バルボリーティ 2002:18）。

また、米山は、こんな思いをさせてはいけないという強力な衝動による被爆体験についての語りについて触れている。例えば、証言活動をする松田豪さんについて、人々を証言活動に導く衝動は、実際にあった過去を証言することにより、別の過去や仮定法の歴史であった反史的歴史の想像力と、語り手が将来、再び起こるかもしれないという警告を伝えたいという思いからだ指摘している（米山 1996:22）。米山は、語り未来の記憶として意識され、そのことを聞き手に伝えようとする時、その語りは、過去に実際に起きた事件の叙述ではなくあることをやめ、可能性上の、想像上の物語りになると述べている（米山 1996:23）。

しかし、この語りの変容は、過去の出来事の体験の記憶の上に、語る行為の一回一回に願いという実践が織り込まれていく過程であり、その変容は、語る人の心の過程——心性の歴史といえるのではないだろうか。

その生き残った人々が語る声には、消えた声と彼ら自身の沈黙の中の声が存在する。その声は、音さえも持つことのできない、生き残った人々の身体に刻まれた広島の記憶を伝えるもう一つの言語である。彼らの発話された声を映像資料として残すだけでなく、その傍らにある声と、語り継ぐという行為——生き残った人々の心性の歴史を、広島の外や後世の人々へ伝えていくことも、とても大切なことであると私は考える。

## 謝 辞

広島にて、被爆体験の話をしてくださり、インタビューに応じてくださった山岡ミチコさん、大林芳典さん、寺前妙子さん、高橋昭博さん、松原美代子さん、森下弘さんに、心よりお礼申し上げます。

## 被爆体験を持つ方とのインタビュー

2004年3月22日広島平和記念資料館にて

山岡ミチコさん

2004年3月24日広島平和記念資料館にて

大林芳典さん, 寺前妙子さん

2004年3月25日広島平和記念資料館にて

高橋昭博さん

2004年3月26日広島平和記念資料館にて

松原美代子さん

2004年8月6日ワールドフレンドシップセンターにて

森下弘さん

## 注

- (1) 1989年秋, アロヨ・デル・オソ小学校の3年生から5年生の子どもたちが, 受けた平和授業をきっかけに, 18人の小学生が, バザーでポップコーンを売り, 11ドル50セントを作って, 1990年2月14日, 子ども平和基金を開設し, 平和の子の像の設立を計画する。平和の子の像の設置許可について, 1992年11月から数回続いた市議会での公聴会では, 大人たちから反対意見が出される。その一方で, この「平和プロジェクト」という子どもたちの活動を, 高校生や大学生, 地域の社会福祉・平和運動家などが支援した。1994年春には, 世界50カ国以上から, 1万5000ドルの署名が2万5000人分集まった。1995年8月6日, 平和の子の像は, アルバカーキ美術館の敷地を借りて, 除幕式が行われた。その像は, 地球の形をしており, この像の内側には, 色とりどりの千羽鶴がつるされ, 地球に巻かれた帯には, This is our cry, This is our prayer, Peace in the world と書かれている(1998年には, サンタフェに移動)。そして, 1996年, その子どもたちの代表が, 広島で開かれた全国高校生平和集會に参加し, 世界中に子どもの平和像をつくるのがぼくの夢という発言から運動が広がっていった。2001年5月5日に, 「世界の子どもの平和像」が, 東京で除幕され, 2001年8月6日には, 「世界の子どもの平和像」が, 広島市民球場正面ゲート前の緑地帯に完成した。その碑には, 「核兵器のない世界のために。この像はヒロシマの子どもたちの愛と平和のメッセージです。」と刻まれている(高校生平和セミナー全国連絡センター編2003; 都留文科大学比較文化学科編2003; 平岡1996)。
- (2) 1995年, イスラエルとパレスチナの紛争で家族が犠牲となった人々が遺族の會を結成した。双方の遺族約500人が参加した。イスラエルとパレスチナの遺族が憎悪の連鎖を自らの意思で断ち, 手を結んで平和を訴え続けている。この會の代表は, 2003年6月17日, 広島を訪れたり, 京都や東京で, フォーラムを実施した(『朝日新聞』2003(平成15)年6月22日付)。

## 参考文献

- 『朝日新聞』2003(平成15)年6月22日付東京総合版。  
『中国新聞』1982(昭和57)年7月27日付。
- 被爆建造物調査研究会編  
1996『被爆50周年 ヒロシマの被爆建造物は語る』広島: 広島平和記念資料館。
- 被爆体験証言者交流の集い団体編  
2002『被爆体験証言者交流の集い団体一覧表』広島: 被爆体験証言者交流の集い団体。
- 平岡敬  
1996『希望のヒロシマ 市長はうったえる』東京: 岩波書店。
- 広島女性史研究会編  
1998「佐伯敏子」『続ヒロシマの女たち』pp.91-103, 東京: ドメス出版。
- 広島平和記念資料館編  
1998『広島原爆被害の概要』広島: 広島平和記念資料館。  
1999『図録 広島平和記念資料館 ヒロシマを世界に』広島: 広島平和記念資料館。  
2004『動員学徒 失われた子どもたちの明日』広島: 広島平和記念資料館。
- 川田順造  
2003「人類学の立場からの問題提起」神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『非文字資料研究』2: 24-26。  
2004『人類学的認識論のために』東京: 岩波書店。
- 高校生平和セミナー全国連絡センター編  
2003『核兵器と戦争のない21世紀をめざす高校生の平和アピール』東京: 平和文化。
- ペルポリーティ, M. 編  
2002『ブリーモ・レーヴィは語る 言葉・記憶・希望』多木陽介訳, 東京: 青土社。
- NHK出版編  
2003『NHKと中国新聞の原爆報道 ヒロシマはどう記録されたか』東京: NHK出版。
- NHK広島「核・平和」プロジェクト編  
2000『サダコ「原爆の子の像」の物語』東京: 日本放送出版協会。
- ノラ, P. 編, 谷川稔監修  
2002「序論 記憶と歴史のはざまに」『記憶の場 フランス国家意識の文化=社会史 第1巻 対立』長井伸仁訳, pp.29-56, 東京: 岩波書店。
- 大西万知子  
1999「視覚に障害を持つ人に配慮された触れる展示の発達比較——日本と英国の博物館——」『博物館学雑誌』24(2): 81-90。  
2004「博物館におけるモノとヒトとのかかわりについての一考察 広島平和記念資料館の事例から」神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報 人類文化のための非文字資料の体系化』1: 212-220。



Quayle, Paul.

1995 Hiroshima Calling. Paul Quayle. (個人出版)

スウィーニー, C.

2000『私はヒロシマ, ナガサキに原爆を投下した』黒田剛  
訳, 東京: 原書房.

高橋昭博

1995『ヒロシマいのちの伝言 被爆者高橋昭博の50年』  
東京: 平凡社.

都留文科大学比較文化学科編

2003『記憶の比較文化論——戦争・紛争と国民・ジェンダ  
ー・エスニシティ』東京: 柏書房.

上村忠男

2000「記憶と歴史のあいだで」『Quadrante (クアドラン  
テ)』2: 7-14.

米山リサ

1996「記憶の弁証法——広島」『思想』8 (866): 5-29.

[2004年10月15日受理, 11月10日審査終了]